

平成 24 年度特別養護老人ホーム「はなの家とむろ」事業報告

今年度は開設 2 年目を迎え、施設としては年間を通しての事業は初年度のため、季節や年間の流れを意識しながら事業を実施した。利用者一人ひとりを深く理解すること、生活の中に季節感や潤いを与えること、終の棲家としての機能を果たせるようになること、職員が生き活きと働き続けられるようにすること等少しずつではあるが前進できたと考える。平成 24 年度の施設目標に沿って総括および年間を通しての実績を報告する。

1. 利用者のサービスを充実させよう

- ① 敬老会や寿司バイキング、節分、ひな祭り等季節に合わせた行事の実施や行事食の提供を行った。
- ② 体操クラブや四季倶楽部等各階ごとの活動やユニットごとに外出や誕生会などの余暇活動が開始できた。
- ③ 月 1 名のペースで看取りを経験する中、「看取りマニュアル」が完成した。
- ④ 信頼関係の構築と質の向上を目指し、利用者満足度調査を実施した。そこから見えてきた課題についてはできることから改善している。今後も定期的実施していく予定である。

2. 働きやすい職場・環境を作ろう

- ① 安全衛生委員会を毎月 1 回開催し、従業員代表(2 名)と職場環境や職員動向を常に把握するように努めた。
- ② 個人目標の設定・評価を実施する中で、年 2 回全職員と個別面談を行い、施設の方針を伝え、職員個々の考え方を理解する機会を持った。その内容を踏まえた配転やユニットごとに利用者に合わせた勤務時間を選択できるようにする等により、離職者は少なく定着率は良い結果となった。
- ③ 職員の採用は経費の掛かる媒体を頼ることなく、ホームページおよび職員等の紹介のみで、良い人材の採用が行えた。
- ④ 施設内研修を 8 回実施した（テーマ：感染症、食中毒、身体拘束・虐待、褥瘡、非常災害）。

3. 地域と連携し、信頼される施設になろう

- ① 町内の自治会に加入し、住民であることへの理解をいただくよう努め、町内の行事に協力し、施設の開放を行った。
- ② 渉外委員会を窓口としてボランティアの受け入れシステムを確立し、傾聴やフラワーアレンジメント、敬老会の催し等で協力いただいた。
- ③ 厚木市と「災害時における要援護高齢者の緊急受入れに関する協定書」を締結した。

4. 安定した運営を目指そう

(1) 入居者の確保

- ① 24年度ベッド稼働率平均98.4%。施設内看取り12名。平均介護度3.69。3月末現在入居待機者108名。
- ② 施設収入の9割弱を占める入居部門を確実に運営することで、経営基盤を固めることができた。
- ③ 人員配置等により取得できる加算（看護体制・夜勤職員配置・栄養マネジメント・精神科療養・機能訓練・日常生活支援）は全て取得し、確実な収入を得られるよう運営を行った。

(2) ショートステイ新規利用者の獲得とリピーターを増やす

- ① 24年度ベッド平均稼働率52.9%。今期最高稼働率65.1%。平均介護度2.5。
- ② リピーターを増やすべく依頼のあったケースは医療依存度が高く施設で対応ができないもの以外は断らないこと、緊急ケースは当日でも対応することを前提に取り組んだ結果、徐々にではあるが稼働率も上がり、当初目標の1ユニットフル稼働を上回ることができた。
- ③ 「厚木市高齢者緊急一時保護事業」の委託契約を行い、今年度1名の受け入れを実施した。

(3) 通所サービスの開始と選ばれる施設になる

- ① 24年4月1日サービス開始。平均介護度2.9。今期は3割稼働という結果となった。1年目とはいえ厳しい状況といわざるをえない。
- ② 重度者の受け入れを最優先にしてきたが、重度であるが故休む確立も高い現状がある。
- ③ 厚木市内に46ヶ所の通所介護事業所がある中で、選ばれる施設となるためには、更なる工夫が必要である。

平成24年度 各部署総括

【 介護部 】

○ 白雪・菜の花・福寿

フロアの特徴として、3 ユニットで構成されており他の階に比べて複雑な協力体制が必要になっている。特に、白雪・菜の花は重介助の方が多く、生活の基礎となる入浴・排泄・食事の三大介助に追われることが多かった。

フロア会議を通じ、白雪・菜の花の食事の時間帯に職員2人を配置できるようになり、食事時間にゆとりをつくることができた。また、ユニット会議を毎月行うことで職員間の情報共有や意見交換ができ、どの職員が関わっても基本的な部分は統一したケアを提供できるようになった。現在、24時間シートを基に、入居者一人ひとりに目を向けたケアの統一を目指して取り組んでいる。

○ 白波・八重桜

- ・ 入居者個々に目を向けたケア（一斉一律のケアの脱却）に努めた。
- ・ 職員間でのコミュニケーション不足が直接ケアにもつながるので、職員間の関係をスムーズにとれる環境作りを行った。
- ・ 余暇活動への取組みを行った。

○ 翡翠・紫陽花

業務的に落ち着いたユニットであり、入居者の余暇活動を中心に、他ユニットに先駆けて積極的に行ってきた。

具体的には、花見・ピクニック・マンツーマンでの個別外出・誕生会などである。入居者に楽しんで頂けており、成果を上げたといえる。

また紫陽花で2名、翡翠で2名の看取りを行った。紫陽花については、開設後間もない時のことであり、対応が十分できなかったと感じる点もあった。しかし、翡翠で看取った方については、ご家族が非常に協力的であったこともあり、各職種間で連携をとりながら、ご家族とも密に接しながら対応ができた。最期をご家族・職員含め大勢で看取れたことも含め「良かった」と感じられた職員も多く、皆良く頑張ったと思っている。

入居者の日々の暮らしについても、まずは基本的な食事・排泄等から個別性を重視した対応を行っている。ご家族ともコミュニケーションを深めながら、今後は余暇の過ごし方についても考えていきたい。

○ 向日葵・紅葉

開設直後で、介護方法等の基盤を作り上げる必要がある中、両ユニット間で協力し合い、他部署の助けのもと無事1年が経過した。

この1年で、両ユニット職員のスキルの把握ができてくる中、どの様に指導していくか悩むこともあったが、まずは入居者の事を第一に考え行動する様に心掛けることを前面に出して指導した。その結果、1年前と比べ大きく成長できたと思う。

次年度は、入居者個々に合わせた余暇活動の充実を図ること、さらなる職員のスキルアップを目指していきたい。

【 看護部 】

入居者の疾病や健康面からのサポートをどのように行っていくのが良いかを考えながら、部内の業務内容の確立や他部署との連携等、基盤づくりを中心に

業務を行った。具体的には、部内での打合せや介護職との申し送り、処置や薬の管理、医師との連絡、受診時や状態変化があった時の対応といった一連の業務について確立できた。また定期的に行っている看護会議においても、さらに効率化と質の向上のため業務内容の見直しを行っている。

また、開設より 15 名の方を看取っており、看取りマニュアルを作成する上でその経験を生かすことができた。

今後は、さらに利用者一人一人に合わせたきめ細やかなケアができるよう観察ポイント等の見直しを検討しているところである。

【 ショートステイ 】

- ①利用依頼があったケースは施設で対応する術がないもの以外は断ることなく、緊急時の受入れも積極的に行った。
- ②新規利用者については、調整のつく限り訪問にて心身状態の確認をし、利用者の個別ケアに役立てリピーターを増やす努力をした。
- ③誕生日のお祝いや日中活動の充実のための手がかりを模索している。

【 生活支援課 】

○リハビリテーション科

①長期入居

特養では個別機能訓練計画書を入居時や 3 ヶ月に 1 度提示することが求められている。その際に、最近のご様子を伝え家族の不安な点等を引き出しながら計画に反映した。また、入居者の心身状態に合わせた車イスやマット、ベッド柵の選定や管理、靴をはじめとする必要な福祉用具の選定やアドバイスをを行った。はなはな体操倶楽部や四季倶楽部を企画し定期的にできるようになった。

②ショートステイ

在宅生活の維持の他に、退院後など在宅復帰目的で利用する方もあり、状況に合わせてリハビリ介入を始めた。

③デイサービス

機能訓練指導員として理学療法士・作業療法士を常勤で配置しているデイサービスは数少ないこともあり、リハビリ目的で開始となる方が増えてきている。在宅生活を支援するため、個別リハビリの実施の他、訪問による家屋評価や担当者会議への参加なども行った。

○栄養科

初年度の目標は、①遅配や事故なく食事を提供する。②食の楽しみを提供する。③経口しか栄養ルートのない中、栄養状態の悪化を防ぐ。 の 3 点とした。

①については大きな混乱なく食事提供ができ、ゼネラルフードと連携して緊急ショートや直前の食事変更にも対応できた。②については寿司バイキングのイベントを成功させることができ、楽しみを提供することができた。また月 1 回の行事食にはゼネラルフード側に施設の意向を反映させるよう交渉しており、普段の献立も徐々に改善していけるよう取り組んでいる。真空調理の導入や、やわらか食の提供前の検食なども行っており、そちらも食事の改善につなげていく。③については定期的な体重測定を実施し、状況の変化に早期に気付くこと、状態によっては食事形態や提供時間の変更など対応することで、できる限

り口から食べ続けることを支援した。

○相談科

スムーズな利用者の受入れと業務の基礎固めを中心に業務を行った。

①利用者、家族の思いやニーズの把握に努めた。

コミュニケーションを適宜行うことに加え満足度調査の計画・実施を通し、利用者、家族の思いやニーズの把握に努めた。把握した内容については各職種にフィードバックを行い、利用者支援に活かしてもらえるよう努めた。

②施設サービス希望者に対する迅速かつスムーズな対応を行った。

長期入居については、入居者が固まった後も継続的に相談面接を行い待機者名簿の管理を行った。ショートステイ及びデイサービスについては、希望者に対してスムーズに利用につながるよう適宜調整を行った。特にショートステイの緊急相談については、ショートステイ部門とも協力し受入れについて連携体制の構築を行った。

③“ソーシャルワーカーは施設の顔”となることを意識し、丁寧な接遇と対応を心がけた。

④ミーティングを定期的に行い、科内の連携を図り業務の基盤作りを行った。

○事務科

3名がそれぞれ与えられた仕事をこなしたことに加え、科内でお互いの仕事内容を理解し、フォローし助け合ったことで業務は軌道に乗せることができた。

今後は、3名が担っている仕事内容を更に理解するために、誰でも部分的にこなせるようにすること、施設の顔となる部署であるため来客者が気軽に話しかけてもらえるような雰囲気・環境を作っていく。

○デイサービス

周囲にデイサービス事業所が多くあるため、他では受入れの困難な重度の方や医療依存度の高い方を受けられる体制を整えた。介護職の他に看護師、理学療法士・作業療法士をそろえ、利用者一人ひとりに合わせた専門的ケアを提供できるよう、介看護間で医療知識の伝達などの連携を図ること、介護職で喀痰吸引ができるよう認定特定行為業務従事者の認定を受けたことがあげられる。また、オープン時に周辺地域へのチラシ配りを実施し、それにより問い合わせがあり利用が開始となったケースがあり、地道な活動の重要性と活動内容の充実を図るべきと実感した。

また、家族、ケアマネに対し利用状況報告書を出し、デイサービスでの取組や利用者の過ごし方を知らせ、信頼感を得るよう努めた。あわせて、社用車のメンテナンスを定期的に行い、送迎や訪問時に利用者やその家族、他事業所への好印象を与えられるよう配慮した。